郭沫若全集

江苏工业学院图书馆
藏书章

第Ⅱ期

第十九卷

岩波書店

野上彌生子全集
第II期 第十九巻
第六回配本
（全二十六巻）

一九八七年四月六日 発行

定価三八〇〇円

著者 野上彌生子（のがみやえこ）
発行者 緑川亨
発行所 株式会社 岩波書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京 六-二六二四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 野上素一 1987 Printed in Japan
ISBN 4-00-091169-4

目次

月桂樹と唐水仙 …… 一
伝説の時代　バルフィンチ …… 二
アキリーズの話 …… 四九五
後記 …… 五一一

月桂樹と唐水仙（ヒヤシンス）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

月桂樹

月桂樹は希臘の神話で音楽詩歌及び医学の神とせられつゝあるアポロの樹となつてゐます。而して戦争などのあつた時凱旋の将軍達の額に勝利の花輪として飾られたものでありますが、その月桂樹の出来た由来については一つの面白い伝説があります。

ある時アポロォは一人の小さい男の子が弓と矢を持つて遊んでるのを見かけました。丁度その頃アポロォはピゾンと云ふ素破らしい大蛇を退治して大分得意になつてゐた折からなので、その子供の側へ行つてこんな事を申しました。

「おい、小僧さん。そんな危ない武器をいぢつてお前は何をしようとするんだ。そんなものは似合つた人の手に任せて置くがいゝのだ。わしがその弓と矢で毒蛇のピゾンを平げた花々しい手柄を御覧。子供は炬火でも持つて遊んでればいゝものだ。決してわしの武器なんぞをいぢるんぢやないよ。」

斯う申しました。ところがその男の子と云ふのはヴィナス女神の息子のキュピットだつたので、中々負けてはゐません。

「アポロォさん、お前さんの矢は他の物なら何んでも射れるだらう。でも私の矢はお前さんを射れるよ。」

と云ひながらパルナッサスの山の岩に上つて、箙から二本の矢を抜き出しました、一本は恋をそゝる矢で、黄金作りで鋭く尖つてゐました。又一本は恋を反ねつける矢で、それは鉛の矢尻のついた鈍い矢でありました。キュピットはその鉛の方の矢で河の神ペニアスの娘なるニムフのダフネを射ました。而して黄金作りの方の矢でアポロォの胸を射通しました。それ故アポロォはそのダフネを恋ひ慕ひましたが、ダフネの方はその恋を反ねつけました。彼女の楽しみは森を駈け廻つて遊んだり、狩をしたりする事でありました。幾人もの男達が彼女の後を追うて歩いたけれども、みんな反ねつけました。お父さんの河の神はしよつちゆう彼女の結婚の事を話し出しましたが、ダフネは結婚などの事を考ふるのは罪悪だとして憎んでゐました。それで美しい顔をまつ赤に染めてお父さんの頸に腕を捲きながら、

「お父さま、私にダイアナ(ダイアナは処女の女神であります)のようにいつまでも結婚せずにゐられるようにお許し下さいまし。」

と申しました。お父さんは承知しました。けれど、

「それにはお前の顔が邪魔をするだらう。」

と申しました。

アポロォはどうしてもダフネが欲しいと思ひました。全世界に神託を与ゆる身も、自分の運命を

ば見通せませんでした。ダフネの肩に打ち乱した黒髪を見ては、

「みだれ髪でもあんなに美しいのだから、髪を結つたらどんなだらう」

と思ひました。彼は彼女の星のように輝く眼を見ました。花のような唇を見ました。肩までむき出しになつてゐる腕を見ると上から見えないように隠れてゐるものは何んでももつと〳〵美しいに相違ないと思ひやりました。その後をつけて行くとダフネは風よりも早く飛んで逃げて、アポロォがどう頼んでも立ち留まつてはくれませんでした。

「ペニアスのお嬢さん。お待ちなさい。」

と彼は申しました。

「私は敵ぢやない。小羊が狼からでも逃げるように、そう飛んで逃げなくもよろしいぢやありませんか。お前が石の上に転んだり、怪我をしたりしやしないかと思ふと、それも私故だと思つて心配で溜らない。どうかゆッくりお駈けなさい。私もゆッくり追ひませう。私は礼儀も弁へぬ百姓ぢやない。ヂュピター大神は私のお父さんだし、私はデルホスとテネドスの王様だ。而して現在未来の万事を知つてゐる。私は詩歌と琴の神だ。私の矢は決して的を外づす事はない。併しあゝ、自分の矢以上の致命の矢が私の胸を貫いたのだ。私は医術の神だから、どんな薬草の効能も知つてゐる。だが仕方がない。私は如何なる薬草も効き目のない病気に苦しめられてゐるのです。」

ダフネはそれでも尚駈け続けて、彼の言ふ事をよくも聞きませんでした。そうして逃げる時でも見惚れる程の美しさでありました。風はその上衣を吹いて、とき放された髪は後に緩く流れました。

アポロォは反ねつけられていよ〳〵心が急きたちました。而して一生懸命になつてやつと彼女に追ひつきさうになりました。丁度野兎を追ふ猟犬が待ち構えた顎をあげて捕へようとする様に似てゐました。かよわい獣は危く免かれて突き進みました。こんな有様でアポロォとダフネとは飛んで行きました。追ふ者はいよ〳〵急に迫まつて、その喘ぐ吐息が彼女の髪毛にかゝる程になりました。ダフネの力はだん〳〵弱はりかけました。少しで倒ふれさうになつたので彼女はお父さんの河の神を呼びかけました。

「お父さま、お助け下さい。私を封じ込めるために地面を開いて下さい。でなくば私をこんな危い目に遭はせた、私の姿を何かに変じて下さい。」

かう云ひも果てぬうちにダフネの四肢五体は硬くこわばつて来ました。胸は柔らかな樹の皮で封じられ初めました。彼女の髪毛は木の葉となり、その両腕は木の枝となりました。足は根のようにしつかり地面に突き込まれました。顔はその美しさばかりが元のまゝで、その前身の面影もない樹木の頂上となりました。アポロォは驚き呆れて立ちました。幹に手を触れて見ると新らしい皮の下に、震える肉が感じられました。アポロォは枝をかきいだいてその樹木に接吻を浴びせました。すると枝はその唇を避けるように反ね返りました。

「お前が私の妻に出来なくなつたとすれば。」

とアポロォは申しました。

「私はお前を私の樹にしよう。私の王冠にかけても屹度私の物にする。又私の竪琴と弓とでお前

を飾らう。偉大なる羅馬(ローマ)の将軍達が、都に凱旋の行式を進める時には、お前は彼等の額を巻く花輪に編(あ)まれなければならぬ。而(そ)してお前には永久の青春をやらう。

それでお前はいつも青々(あを〻)としてるだらう。お前の木の葉は凋落を知るまい。」

ダフネは今や月桂樹となつたのでありました。アポロォがさう云つて聞かせるとその時満足な謝意を表はすために、その月桂樹は樹の頂(いただき)を下げてお辞義(じぎ)をいたしました。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

唐水仙（ヒヤシンス）

ヒヤシンスも亦アポロォの愛した青年から生じた花であります。

アポロォはヒヤシンチウスと云ふ一人の青年を非常に愛してゐました。彼は野外の遊びには屹度（きつと）その青年を連れて参りました。漁に行く時には網を運ばせました。狩猟（かり）に行く時には狩犬（かりいぬ）を指揮させました。山に行く時にはアポロォの竪琴と弓矢とを預つて随（つ）いて行きました。

或日二人は円盤投げをして遊んでゐました。アポロォは腕の冴えた力でその鉄の輪を高く振りながら高々と遠くの方へ投げました。ヒヤシンチウスはそれの飛ぶのを見詰めてゐました。遊びに気が立つてゐるのと自分が投げる番になり度（た）くて堪らないのとで、彼は早速走り出てその円盤を捉えようといたしました。するとその時円盤は地面から反（は）ね上（あが）つて、ヒヤシンチウスの額にぶつ付（つ）かりました。彼は気絶して倒れました。アポロォは自分の事のようにまッ蒼（さを）になつて抱き起しました。而（そ）して手を尽して創口（きずくち）の出血を止めよう、消えて行く生命を取り止めようといたしましたが、すべてその甲斐もありませんでした。創は医薬の力の及ばぬ程のものでありました。花園で百合花（ゆりのはな）の茎（くき）を折ると百合花は頭（あたま）をうなだれて、その花を地面の方に向けるように、死にかけた少年の頭（かうべ）は、頸（くび）

に重過ぎるように肩にうなだれました。

「ヒヤシンチウスよ、お前は死ぬのか。」

とアポロォは申しました。

「わし故にお前は若さを失つた。わしの罰はお前の苦しみだ。わしはお前のために死ぬ事が出来ればいゝと思ふ。併しそれは迚も出来ない事だから、これからお前はわしの記憶と歌の中にわしと一緒に生きなければならぬ。わしの竪琴はお前を名高くするだらう。わしの歌はお前の運命を語るだらう。而してお前はわしの哀惜を刻んだ花となるだらう。」

アポロォがかう話してる間に、地面を血が流れ出したと見てゐると、草を染てもう血ではなくなりました。而してタイア紫よりかもつと美しい色の花が生えました。百合花によく似た花で、百合花は銀のやうに白いのに、これは紫の花だと云ふだけの違ひでありました。アポロォに取つてはまだこれだけでは気がすまぬので、尚この上の名誉を授くるために自分の悲しみを花片にとめて、

「あはれ、悲し。」

と書きました。それは今日でもその花片の上に見る事が出来ます。又此花にはヒヤシンチウスの名をつけました。即ち唐水仙の花で春毎にその運命の記念を甦らしてゐます。

又かう云ふ事も云ひ伝へられてゐます。ゼフクーラス（西風の神）も亦ヒヤシンチウスを可愛がつてゐたのに、アポロォが先取りしたのを嫉妬して、円盤がヒヤシンチウスに当るような風向きに吹いたのだと云ふのです。

伝説の時代

神と英雄の物語

トマス・バルフィンチ

改訳版序

この「伝説の時代」は大正二年に一度出版したものだけれども、今度殆んど根本から改訳したので、私に取つては全然新しい仕事になつた。気になつてゐた固有名詞の発音の不統一もすつかり整頓した積りである。それはすべてロンドン大学のヂョーンズ博士の発音法に依ることにした。挿絵も多少入れ代へ、索引も作り直した。

私情を述べることを許されるならば、この書物は古典に対する私の初心な興味を芽生えさしてくれた点で、私には忘られぬ思ひ出を伴つてゐるだけに、今版を改めて再び世の中に送り出すことの出来るのは非常に悦ばしい。同時に、この書物が私自身に及ぼしたと同じ影響を読者の上にも及ぼして、古いけれども常に新しい古典の興味を幾分でも刺戟するに役立つならば、私の仕事も決して無意味ではなかつただらうと思はれる。

たゞ此際、十年の年月の変化がこんな小さい書物の中にもはつきり入り込んでゐるのを見るのは感慨無量である。初めに訳した時、わざ〳〵序文を書いて下すつた夏目先生はもうお亡くなりになつてしまひ、私がこの書物をデヂケートした時には、まだいろはさへも読めなかつた素一は、もう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com